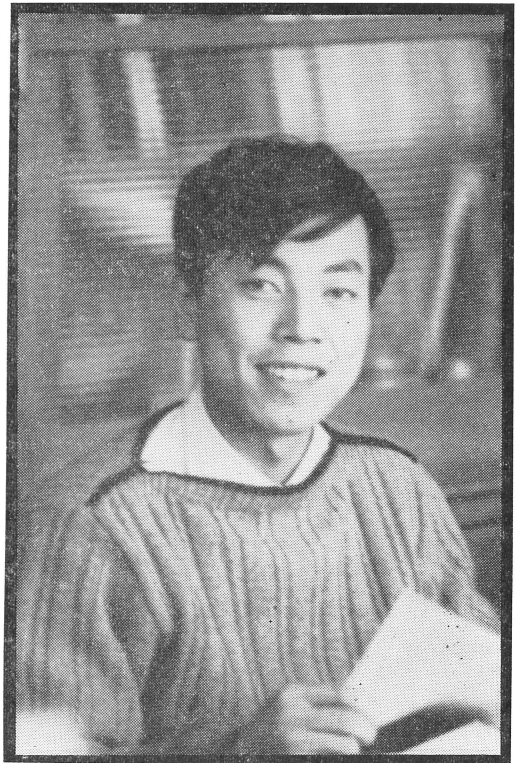




故 田 沢 誠 一 氏



故 葛 西 俊 之 氏

田沢誠一、葛西俊之両君の死を悼む

田沢誠一、葛西俊之の両君は昭和43年4月4日石狩川源流域の積雪量を航空写真法により測定中、航空機の事故により遭難、殉職した。

田沢君は昭和12年新潟県魚沼郡千手町に生れ、同37年北海道大学水産学部卒業、同大学大学院理学研究科に進学して気象学を専攻し、同41年理学部助手に任ぜられ43年に殉職、助教授に昇進した。

同君は新しい観測器械の開発に特に優れた能力を示し、君の開発したスノークリスタルゾンデは、先年東京における国際雲物理学会でシェーファ博士の激賞するところであった。また昨年、米国の五大湖の降雪の日米共同観測にでかけた際もワイクマン博士やボネガット博士は君の見事な成果に称讃の詞を惜しまなかった。君は北大の気象学研究室のみならず日本の雲物理学グループが

世界に対して誇りうる新進研究者の一人であった。

葛西君は昭和14年北海道赤平市茂尻に生れ、同38年北海道大学理学部卒業後、同大学大学院病理学研究科に進学して気象学を専攻、同42年理学部助手に任ぜられ43年に殉職、助教授に昇進した。

同君は雲の写真解析で研究生生活のスタートを切り、最近君の開発した気象衛星写真の実体鏡方式にもとづく雲の三次元的解析方法は、恐らく本家の米国航空宇宙局でも思いおよばなかったところで、これからの発展が大いに期待されていたところである。

今回の積雪観測は国際陸水十年計画の一環として、これまで手のつけられていなかった石狩川源流域の広大な地域の積雪量分布を10年間にわたって連続測定を行い、気象の型と比較しようという野心的な仕事

の第2年度に当るものであった。測定を容易にするために、夏の中にスノーマーカーを基準点に設置しておいて、最大積雪季の3月下旬から4月上旬にかけてスノーマーカーの斜め航空写真で一挙に積雪量分布を出そうとする試みであったが、この方式が反つて両君の生命を奪う結果となつてしまった。

スノーマーカー方式については田沢君は孫野と連名で予備観測の結果と石狩川源流域に40個のスノーマーカーを設置した結果をまとめて42年の秋の学会で報告している。設置点の選定にあたっては 1) 積雪量の代表性、2) 空からの発見が容易で撮影に便利なこと、3) 自動車道路に近いことが留意された。

昭和43年3月30日から5日間にわたって航空撮影班とスノーサンプラーによる地上班により観測が開始された。両君はチャーターした北海道航空のセスナ機で、この期間内の好天の日を覗い、4月1日の場合は非常に悪気流のため3点の撮影だけで引返した。

4月4日は好天に恵まれ、再び札幌の丘珠空港を11時45分に出発し、そのまま消息を絶った。帰着予定時刻の午後4時をすぎても空港に何の連絡もないので大騒ぎとなった。

4日夕刻から航空機、5日早朝から地上と、大雪山系一体に空陸の大捜索が開始され連日十数機、十数ヶ班の捜索隊がくり出され皆は両君を存命中に何とか救出するつもりであったが遂に果せなかった。4月8日午前10時45分セスナ機がユニ石狩岳北斜面に撃突しているのが自衛隊ヘリコプターにより発見され、つづいてパイロットを含めて3人の遺体が確認された。

地上捜索の途、いろいろと聞込み捜索も行われたが、同機が非常に低空を飛び、その目撃位置はきまってスノーマーカーの近くであったことから、少なくとも前半は順調に撮影が進んでいたらしい。また両君の撮影したフィルムは未だ手許に帰っていないが、きくところによれば予定の半分のスノーマーカーが撮っているそうである。事故の直接原因は当局の正式発表をまたなければならぬが、両君が死の直前まで撮影をつづけていたことはほぼ確実であり、まことに見事な最後であった。しかし今後気象学に対し貢献したであろう無限の可能性を秘めたまま、早く逝ってしまった両君の死が惜しまれてならない。

(孫野長治 記)

田沢誠一

論文題目

- 繫留気球による鷗川付近の海霧の観測；地球物理学研究報告第11号 (1963) pp. 3—9 田沢ほか2名
- 繫留気球用自記通風乾湿計の試作；天気 vol. 11, No. 8 (1964) pp 252—254.
- Observations of Snow Clouds by Means of "Snow Crystal Sondes"; Proc. International Conf. on Cloud Physics, Tokyo and Sapporo. (1965) pp 231—235. 田沢ほか1名
- A Study on the Snowfall in the Winter Monsoon Season in Hokkaido with Special Reference to Low Land Snowfall (Investigation of natural snow crystals VI); 北大理, 紀要, Vol. II. No. 3 (1966) pp 287—308. 田沢ほか4名
- Design of "Snow Crystal Sondes"; Jour. Atmos. Sci. Vol. 23 (1966). pp 618—625. 田沢ほか1名
- S.C. Sonde による雪雲の観測 (III); 日本気象学会昭和41年秋季大会 田沢ほか1名
- S.C. Sonde の捕捉率の決定; 日本気象会昭和41年秋季大会 田沢ほか1名
- 航空写真用スノーマーカーによる積雪量の測定方法について42年秋季大会 田沢ほか1名

葛西俊之

論文題目

- Studies of Clouds produced by Low Level Jets and Mountain Waves.; 気象集誌 Vol. 43 (1965) pp 196—205.
- An Observation of Snow Crystals and Their Mother Cloud (Investigation of Natural Snow Crystals V); 北大理, 紀要, Vol. II. No. 2 (1965) p.p. 123—148 葛西他4名
- A. Study on the Snowfall in the Winter Monsoon Season in Hokkaido with Special Reference to Low Land Snowfall (Investigation of natural snow crystals VI); 北大理, 紀要, Vol. II. No. 3 (1966) pp 287—308. 葛西ほか4名
- 海上の雲の航空写真による解析 I (雲の高度の決定) 天気 Vol. 13 (1966) p.p. 325—330. 葛西ほか1名
- Preliminary Observation of Cloud Distribution using a 16mm Movie Camera from an Airplane—Clouds over the Pacific Ocean: Part I—; 気象集誌, Vol. 45 (1967) pp 177—184. 葛西ほか2名
- Cloud Distribution across a Cold Front over the Middle Northern Pacific Ocean—Clouds over the Pacific Ocean: Part III—; 気象集誌, Vol. 45

- (1967) pp 478—489. 葛西ほか2名
 ◦ Stereoscopic Analysis of Photographs taken by NIMBUS II APT.; 気象集誌, Vol. 46 (1968) pp 60—67. 葛西ほか1名
 ◦ ベトナム，タイ付近の雲の航空写真解析と TIROS 写真の比較; 日本気象学会41年春季大会 葛西ほか2名

- 冬期季節風時に於ける列状雲に対する地形の影響について; 日本気象学会41年秋季大会
 ◦ 雪雲の TIROS 写真と地上観測写真との比較解析; 日本気象学会 41年秋季大会 葛西ほか1名
 ◦ 石狩平野における雪雲の総合観測 V; 日本気象学会 41年秋季大会 葛西ほか2名

山の気象シンポジウム アブストラクト

日 時：6月15日 13時より

会 場：気象庁第1会議室

1. 大井正一 (気象研究所)：連休の天気について
 一昨年(1966)の五月の連休に富士山で斎藤さんが遭難され、その後筆者がドイツ人と一緒に登山して嵐に逢った。今年(1967)の五月の連休にも富士山で天気図からは意外な天候となった。此の3回は何れも異常気象の如くに見られるがこう度重なると異常なのか正常なのかも判らないで少し調べて見た点をお話したい。(20分)

2. 宮内駿一 (気象庁)：低気圧接近時の好天について (43. 4. 28谷川の遭難)

4月28日谷川岳一の倉沢で東海大学山岳部員4名が遭難死亡したが、34年5月18日専修大学山岳部員3名が同じ一の倉沢で遭難死亡している。どちらも低気圧が接近しつつある時の登山で、予報技術者なら登山はどうかと思うような日である。しかし登山を決定したのは日常予報が外れることがあることと、目前の天気が割合よい方であったらしい。しかし低気圧の接近する前の一時的好天は時々あることで慎重に判断すべきことである。(特に南西風の時降り出しが遅れるので登山者は予報の外れと思うのであろうか?)

3. 三寺光雄 (気象研究所)：森林と気象

わが国のきびしい自然は、生物的自然にどのような影響を与えているか。国土の7割をしめしていると云われる。わが国の森林は、気象にどのような影響を与えているか。こうした課題は以前から考えられてはいたが統一的な研究はまだ進んでいない。

ここでは、竹林の研究を通して、森林がもつ機能、環境としての気象の役割などについて述べたい。最後に人間社会に対する森林の効用についても述べる。

4. 小岩清水 (専修大学付属京王学園)：森林景観より見た気候 [早池峰第4報]

早池峰気候調査の一環として、早池峰域で最も自然環境の厳しいと思われる七里河原沢上流右股沢の調査を実施しその特異な森林景観から主として冬の積雪移動(匍行現象、雪崩現象)等の状況を推定する事ができた。特に平均積雪で1.5m程の早池峰山域で局地的に沢の中に集中する雪の深さは17m以上に達する等、登山者の立場からも注目すべき結果となった。これらについて第4報として報告する。

5. 山本三郎 (河口湖測候所)：富士山接地層の気流について [富士山の気象第9報]

富士山の接地層付近には、前面・後面・側面強風地帯、整流域、突風地帯、ツムジ地帯、弱風域などがあり、この風系はその日の(山頂上を吹く)主風向、風速と密接な関係にあることを第4報(昭35年6月)のモデルで述べた。今回、気象研究所予報研究部との共同調査によって、山体に発生した雪煙を16ミリコマどりで撮影した。このフィルムの解析結果によっても、先のモデルの正しかったことが証明される。そして、冬の吉田口登山道8合目付近の滑落事故多発地が、接地層の気流と密接な関係にあることを述べる。[16ミリを使用 約10分]

6. 飯田睦次郎 (気象研究所)：夏山要注意気象について

夏山で注意を要する気象現象として、台風、集中豪雨、雷の3つをあげることが出来る。今回は昭和31年から40年迄の7、8月におけるこれら気象現象についての統計および夏季における天気図型の分類との関連、その他、夏山登山での気象による注意事項を考察する。